

彩の歳時記

平成二十八年 一月

あらた
新しき年の初めに思ふどち い群れて居れば嬉しくもあり

ふなどわう
道祖王【万葉集】

『新しい年の初めに 気のあった仲間たちが集まっているとうれしいことだよ』

正月の異称は「睦月」と言うように、親戚一同が集まり睦まじく新年を祝う月。昔を懐かしみ、若い力を子や孫から得、祖先と子孫が交流する伝統は万葉の昔から受け継がれています。新年の集いなどを通して人との繋がりを深め、新たな力を蓄えたいものです。「どち」は「友」の意で友達。

睦月



一月の暦 睦月【むつき】

一日 元旦 元旦は一年の始まりの旦(あき)、昔から一家の主人や主婦が身を清めて正装し、四方の神々を拜んでから若水を汲み、神棚に供える習慣がある。昭和二十三年に国民の休日。皇居では、天皇が朝五時半に四方拜(伊勢の大神宮に拝礼後、四方の諸神を拜し、豊作と無病息災を祈る)

二日 「新年祝賀の儀」、国事行為。総理大臣、知事等が天皇・皇族に新年の挨拶をする。皇居一般参賀 皇族が国民の参賀に応える行事。昭和二十八年から行われてる。参賀者の記帳は十年間宮内庁に保管。一般人が二重橋を渡って皇居に入る。

初夢 新年に初めて見る夢。夢の内容で一年の吉凶を占う風習。

書き初め 五日に日本武道館で日本武道館主催全日本書初め大会が催される。全国的に各種メディアで放映され、新年の風物詩の一つとなっている。

第九十二回箱根駅伝

1920年(戦時中一時中止)から続く歴史と伝統の大会で新年の風物詩。前会で初の総合優勝の青学大、全日本大学駅伝を制した東洋大などが頂点を狙う。

箱根駅伝

四日 官公庁御用始・仕事始め 十二月二十九日から一月三日までが休暇と法律で定められている。大発会(だいはつかい) 日本証券取引所における年始の最初の取引日のこと。

六日 小寒【二十四節気】「寒の入り」。節分(立春の前日)までが寒の内(うち)で寒さが厳しい。



七日 人日の節句 七草粥を食べることから「七草の節句」とも。五節句【一月七日・三月三日・五月五日・七月七日・九月九日】の一つ。春の七草(芹・なずな・御形・はこべら・仏の座・すずな・すずしろ)粥を食べ、一年の息災を願う。前夜か早朝に七草を吉方に向かってはやしなから

たたいて粥に入れる。元旦からこの日までを【松の内】。注連飾りや門松を取り除く。



八日 左義長(どんど焼き)注連飾りや書き初め等を燃やす。十日が十五日に行う地方も多い。

十一日 鏡開き 元は武家社会の風習。年神様に供えた餅を雑煮や汁粉にして食べる。「切腹」を連想させる「切る」ことはせず、割ったり砕いたり、「開く」という縁起の良い言葉に。



十一日 成人の日 国民の祝日 ハッピーマンデー制度導入に伴い、2000年から第二月曜日に。十五日 小正月 松の内【大正月】に忙しく働いた主婦をねぎらって、この日を「女正月」という地方も。十七日 阪神淡路大震災記念日 1995年のこの日、震度「都市直下型地震が発生した。」

二十一日 大寒【二十四節気】「寒の内」の真ん中。一年で最も寒い時期。

一月の歌 江戸子守唄

文化文政の頃からの記録がある。

子供を寝かしつける時に歌う典型的な「寝させ唄」。

日本の子守唄の原型といってもよく、江戸への憧れをかきたてるこの唄は各地方のお国言葉や慣習に沿って少しずつ変化しながら



やがて全国に伝播、類歌と呼ばれるバリエーションは全国の3000近く見られる。笙の笛は玩具笛で江戸時代初期の浮世草子類にも散見、伊勢土産として知られ、現在も伊勢神宮土産物として売られている。人と人を繋ぐ「子守唄」は江戸時代から連綿と今も生き続けている。

ねんねんころりよ おころりよ
坊やはよい子だ ねんねしな
ねんねんの子守は どこへ行った
あの山こえて 里へ行った
里の土産(おみや)に何もちた
でんでん太鼓に 笙(しょう)の笛

